

「包摂と自律の人間学—空間をめぐる」発表要旨草案(追記・改訂版)

「循環する場所」としての枯木又 —エコミュージアムと／から大地の芸術祭へ—

<はじめに>

発表者は、新潟県十日町市¹・津南町にて 2000 年から 3 年毎に開催されている、「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭」²における地域変容をテーマに、2008 年よりフィールドワークを行っている。

本発表では、東京 23 区の 1.2 倍、760 平方キロメートルに渡るエリアに約 360 点ある作品のひとつが展開されている枯木又集落³に焦点をあて、集落が 20 年前から取り組む「エコミュージアム」が大地の芸術祭に包摂されつつも、自律的な動きへと結びついているさまを検討・報告する。

<エコミュージアムとは>

エコミュージアムは、フランスの近代博物館学者ジョルジュ・アンリ・リヴィエールによって、1970 年前後に提唱された言葉⁴で、「地域の人々が自らの地域社会を探究し、未来を創造するための総合博物館」を意味する。これは、人々の生活とその自然・文化及び社会環境の発達過程を住民自身が史的に調査し、自然・文化遺産などを現地において保存・育成・展示することを通じて、地域社会の発展に寄与することを目的とする、新しい理念を持った博物館⁵と定義づけられている。その役割として、①研究所＝生活・環境の研究とその向上の摸索 ②保護センター＝自然・文化・産業遺産を守り育てる ③学校＝仕事や生産の効率化、地域発展に寄与する人材の育成 が掲げられる。

リヴィエールは、エコミュージアムの基本構造として、次の5つの要素を挙げている。(別紙の図参照)

- ① テリトリー：対象となる境界領域／文化圏・行動圏・生活圏／行政圏とは必ずしも一致せず
- ② コア・ミュージアム(中核博物館)：サテライト間のネットワークや活動の中心、内外との情報伝達基地
- ③ サテライト(衛星博物館)：領域内に散在する、地域特性としての自然・文化・産業遺産
- ④ 発見の小径：野外に点在する「展示」を安全に効率的に案内する小径⁶
- ⑤ アクセス道路と交通標識：外部からエコミュージアムにたどり着くための交通標識

<枯木又エコミュージアム>

¹旧十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町が 2005 年に合併

²大地の芸術祭は、平成の大合併に向け、新潟県を13の広域圏にわけて10年間に及ぶソフト事業を展開する政策「ニューにいがた里創(りそう)プラン」(1996 年採択)のひとつ、現代アートによる地域活性化を軸とした「越後妻有アートネックレス事業」として企画されたものである。

³ 枯木又集落は十日町市街地から車で 30 分ほど、東はずれの山の尾根に位置。殿畑・東枯木又・西枯木又からなる当地には、現在 11 軒計 34 名が暮らす。発表者は、2009 年の第 4 回大地の芸術祭において、当集落で始まった「京都精華大学枯木又プロジェクト」の芸術祭実行委員会側の担当／研究者として初めて接触し、翌年には京都精華大学側の担当者、以降は枯木又エコミュージアム会員／研究者として関わっている。

⁴ エコミュージアムは、エコロジー(生態学)とミュージアム(博物館)を組み合わせた造語で、1971 年プージャット環境大臣によって、公式の場で初めて用いられた。ちなみに、エコロジーという言葉は、ギリシャ語の「オイコス(家族・生活の場)」に由来し、ドイツの生物学者ヘッケルによって作られた概念(生物とその環境との関係を研究する学問領域)。

⁵ 日本の博物館法(昭和 26 年)と比べると、①当該地域の発展への寄与を目的とする ②現地保存型の野外博物館である ③住民の運営参加が原則であることが、3 原則として特徴的。

⁶ フランスのロゼール山国立公園・エコミュージアムの「展示」では、景観を損なうとの観点から説明板は建てていない。路傍の石に番号のみが書いており、見学者は地図と番号順の説明書を持って見学する。後述するが、この巡行型の見学形式は、大地の芸術祭のそれと似ている。

枯木又エコミュージアムの始まりは 1992 年。89 年より国内で「エコミュージアム」の普及に取り組んだ新井重三⁷の定義を参照しつつ、当地の取り組みを①建物ではなく地域である ②収集品の展示ではなく地域内の自然・文化遺産の発掘・展示である ③訪問者が見学するのではなく地域住民が研究・利用していくものである ④専門家が主ではなく地域住民が主体である と定義づけている⁸。

この取り組みは、1962 年新潟子供の会⁹による僻地訪問以来続く OB らとの交流 20 周年¹⁰を記念して始まり、枯木又の魅力を外部に発信する写真絵はがきの発行、自然観察会や山菜料理講習会、浦和→枯木又リレーサイクリング、手打ちそば会などの年間イベントの総括にあたるものであった。95 年には「エコミュージアムの会」を発足、市からまちづくり特別支援事業¹¹30 万の助成を受けて自然観察の小道や案内看板など主にハード面を整備。97 年には 3 周年記念事業として県・市からの助成 200 万を受け、どじょうの養殖・講演会・ウォークラリーなどソフト面の事業を中心に展開した。その趣旨に賛同する地元会員・一般会員・賛助会員約 200 名¹²からの会費をもとに、集落の自然・歴史・文化・産業など全てを「博物館」とする諸活動を行っている。¹³

＜エコミュージアム前史 「コア」としての枯木又分校＞

「エコミュージアム」の概念自体が枯木又に持ち込まれたのは 92 年であるが、その端緒は 1955 年に遡る。集落が属する旧中条村が旧十日町市に併合された翌年、枯木又分校に教員夫婦¹⁴が赴任する。以来、24 年に渡って校長・教員を務め、退任後も集落に住まい続けた彼らは、閉鎖的な集落の状況に危機感を抱き、職員室や自宅を開放。県内でもいち早く授業に TV・映像教材を導入したり、土器の発掘やスキー遠征を行うなど、独自の教育を展開した。さらに 62 年からは、「山の中の僻地だからこそ外の世界に触れることが大切」¹⁵と、新潟こどもの会の訪問団を断続的に受け入れ、時代を経ても山菜採りや田植え等の野外活動が授業の一環として行われた¹⁶。教員夫婦が小学校時代を過ごした 1930 年代は、児童に愛郷心愛国心を涵養させることで、恐慌で疲弊した農村を立て直す自力更生の

⁷ 地質学を専門としながら、1948 年秩父自然科学博物館の研究員となったことを機に博物館学を研究し、野外博物館の理論的体系化を行った人物。89 年以降は、国際博物館会議の初代ディレクタージョルジュ・アンリ・リヴィエールの提唱した「エコミュージアム」を研究の中心にすえ、丹精総合研究所の研究員としてその構想の普及に尽力した。

⁸ 平成 4 年度まちづくり特別助成事業「枯木又は十日町市の東の玄関口 [エコミュージアム枯木又] を創ろう！」(枯木又青年会作成) より。下線は本文ママ。

⁹ 県立新潟高校と新潟中央高校の学外団体

¹⁰ 最初の僻地訪問からは 30 年、交流施設である「なしの木荘」ができてから 20 年。

¹¹ 竹下内閣時のふるさと創成基金による十日町市の支援事業

¹² 平成 24 年現在は 82 名。家族会員を含むため、交流人口的には 100 名程度。役員には集落住民以外の会員も含み、毎年ゴールデンウィークに総会を実施。前年度の年間活動・会計報告と次年度の計画が呈示・審議され、講演会と交流会が実施される。会費は一般会員 4000 円、賛助会員 11000 円で、季刊の会報の送付・山菜採りや宿泊施設の利用費の便宜がはかれるほか、後者には年一回特産品が送られる。

¹³ エコミュージアムの活動としては、盆祭りや龍王祭・かくせつの会・山学校(埼玉県の子供たちが参加)などの行事、そば打ちや藁細工の講習会(外部向け兼集落内での技術伝承)のほか、草刈りや雪囲いなどの集落維持活動が含まれる。なお、エコミュージアムの活動として扱われてはいないが、東枯木又では新潟県農地部職員を中心とした組織「ECHIGO 棚田サポーター」の受け入れも行うなど、他外部団体との交流活動も存在。

¹⁴ 2009 年の夫人への聞き取り(当時すでに長岡旧家出身のご主人=元校長は逝去)によれば、戦後、長岡市内にてポマードやアミノ酸醤油の製造をしていたものの、商売が暗礁に乗り上げた頃に十日町市の知り合いから分校の教員のなり手がいないとの相談を受け、当地に赴任。夫婦ともに師範学校に通っていなかったため、代用教員での採用であった。昨年夫人も逝去され、今は東枯木又の地蔵様の墓地に眠る。

¹⁵ 2009 年の夫人への聞き取りより。地域の外で見識を広げることが大切との教員夫婦の勧めで、青年会では 80 年代後半まで年一回の研修旅行も実施。

¹⁶ 卒業生である住民の指摘および、「枯木又分校閉校記念誌」より。

精神を育む方策として、教育界で郷土教育が盛んに提唱された時代と言われてきた¹⁷。こうした夫婦の教育を受けた世代が青年となった時、エコミュージアムが誕生したのは偶然ではあるまい。

分校は、年始行事や秋祭りの演芸会、青年会や婦人学級、TV や映画上映会などの会場＝枯木又の集落センターでもあった。特に、婦人学級による民俗調査の取り組み(冊子「枯木又を調べる」)¹⁸は、エコミュージアムの基礎資料として活用された¹⁹。分校は、名実ともにエコミュージアムの「コア」と位置づけられる場所²⁰だったのである。

＜エコミュージアムとノから大地の芸術祭「廃校プロジェクト」へ＞

最後の小学生が巣立った 2007 年、分校は 119 年に渡る歴史に幕を閉じた²¹。2003 年以降、エコミュージアムの諸活動は、中山間地基盤整備事業の一環として建設された交流施設「のっとこい」に次第に拠点を移しつつあった²²が、2009 年大地の芸術祭の「廃校プロジェクト」の舞台として、京都精華大学の教員・学生が作品を制作するに伴い、分校は従来の「コア」としての位置づけから退くこととなった。

2009 年の京都精華大学カレキマタプロジェクトでは、「記憶と発動」をテーマに、校舎や校庭・学校周辺にインсталेशनやアーカイブ展示等が展開された。つきあいがまだ浅く、枯木又集落の住民が芸術祭に関わること自体が初めてだったこともあり、ワークショップへの一部住民の参加や滞在制作への協力等は見られたものの、両者の活動は基本的に併置状況にあった²³。住民・関係者から作品に意見する場面はあまり見られなかったが、校庭に車田を作り、周囲に稲架木としてクヌギの木を植樹する作品「大地の記憶」²⁴に対しては、制作前の説明会当初から、住民・エコミュージアム会員から抵抗感が示された²⁵。さらに、盆踊り会場は校庭から「のっとこい」駐車場へ移行、秋祭

17 さらに、土地の歴史や習慣だけでなく、外部との接触の大切さを盛んに訴えた彼らの姿勢は、明治初期までの教育を「郷党旧故以外の者に、適用することを予期しない道徳のみ」を教えるものとして批判し、郷土の古きを知り、他所との比較を行う新たな視点の必要性や、教員の役割の重要性を説いた柳田国男の主張にも通ずる。くしくも、市制町村制公布のもと、新たな行政村に通用する道徳＝公徳の必要性を訴えた柳田同様、彼らが赴任したのは集落が新たな行政区(旧十日町市)に併合された翌年であった。

18 当時の公民館長(のちに十日町市博物館館長)の提案により、1974 年から 3 年間に渡り、集落の年間行事や食文化・生活習慣・方言・民話・歴史などを年寄りに聞き取り調査し、冊子にまとめた。以降、聞き取りした民謡や民話をもとに、カラーの影絵芝居を制作。県内外で講演するとともに、担い手が少なくなった 94 年には木版画の絵本として出版。山地の集落の婦人会による積極的な発信活動に、当時は注目が集まったとのこと。

19 エコミュージアム開始前には、関係者によって集落の年寄りへの聞き取り調査や資料の蒐集が行われたが、まとまった文書・資料としては現在残っていない。

20 なお、エコミュージアムは、枯木又の青年会と交流メンバーを中心に立ち上げられ、必ずしも集落の全ての人が参加している取り組みではない。エコミュージアムの施設として掲げられてはいないが、農機具倉庫の二階に、地域の民具や農機具・古文書などを集めて展示したスペースがあり、エコミュージアムとは別の見地からの地域文化・風習・知識の保全を目指す取り組みも存在する。ここは、平成 22 年秋の農協のミニコミ紙に紹介され、今年の大地的芸術祭期間中には地元を中心に 10 名程度の来訪者があった。新潟県の民俗学研究会に一時期所属していた主によれば、今後、それぞれのモノの使用法や名称を来訪者・地元後継者向けにわかりやすく説明を加えた展示にしていく予定とのこと。

21 2007 年秋からは、枯木又にゆかりのある外部メンバーによって構成される「分校の活用を考える会」が立ち上がり、分校建物の維持管理にあたった。

22 それまで東枯木又の集会所で行われていたエコミュージアムの定例会は、建設後はのっとこいで開催されるようになる

23 2009 年の芸術祭の期間中、交流施設「のっとこい」では、住民により、週末とお盆期間に集落の名物黒米を使った黒米そばの店が開かれた。当時は、精華大学は分校で、集落は「のっとこい」でと、それぞれがそれぞれの拠点で活動する状況であった。

24 京都精華大学芸術学部立体造形コース教授内田晴之の作品。校庭に車田を作り、周りに稲架木となるクヌギを植樹、畦部分には彼岸花を植えた。2012 年には車田に水を張り、長期的に水田へと育てていくプロジェクト。

25 校庭自体土壌が田んぼに適さない、田んぼを作ると校庭の水はけが悪くなってしまふ、クヌギは豪雪の枯木又には自生しておらず育たないため土地にあった木を植えるべき、彼岸花は自生種ではないので地元で咲く多年草のほうがいいのではないかなど。野外博物館の理論的体系化を試みた博物館学者落合知子は、南方熊楠に由来する野外博物館の重要な要素として、植栽の展示を挙げている。西枯木又のある年寄りは自らの名前にちなんで山に千本の杉を植樹、生態系保護協会川口支部長を務めるエコミュージアム会員は、集落の山にあるキャンプ場に植樹をするなど、「木を植える」という行為には、それぞれの立場から異なる

りの演芸会は体育館に作品があるとの理由で中止された²⁶。大地の芸術祭開催にあたっては、主催側が枯木又エコミュージアムについて「いろいろ勉強した」²⁷といわれる。現代アートを主軸としながら、芸術祭自体エコミュージアムの流れに組みする部分も大きく²⁸、分校は、広域の新たなエコミュージアムの「サテライト」に位置づけられるとともに、集落内でもその位置を変えたのだろうか。

<「循環する場所」としての枯木又>

芸術祭の一部に包摂されたかに見えた分校は、集落行事・祭りへの参加や雪掘り体験など、大学側と集落の様々なつきあいを通じて、少しずつ位置をずらしていく。昨年は大学側とともに、校庭での盆踊りと体育館での龍王祭を実施。休耕田に大学が住民の指導のもとソバ畑を作ったり、住民がエコミュージアムの研修として京都に赴き、地域で京野菜を育てるなどの展開も見られた²⁹。これら一連の活動は、総務省が平成 21 年度より推進する「緑の分権改革」の委託調査事業(平成 23 年度十日町市受託分)の一部「(大地の芸術祭を通じた)コミュニティ・デザインプロジェクト」のひとつとして取り上げられた。2012 年の芸術祭では、調査で取り上げた集落を中心に、芸術祭の新たな取り組みとして「コミュニティ・デザインプロジェクト」を展開したが、枯木又はその中に入っていない。分校での生涯教育活動・長きに渡る外部との交流、内発的なエコミュージアム活動が行われてきた枯木又は、「作品」として新たな施設が立ち上がることで、地域内の新たな活動や外部とのつながりが初めて生じた他の場所とは異なる。芸術祭という広域プロジェクトに包摂されるに留まらず、芸術祭をきっかけとした京都精華大学との交流もまた、自律的な活動の新たな動きとして展開されているのである。

「循環する時」をテーマ³⁰とした今年のカレキマタプロジェクトでは、水を張った校庭の車田中央に櫓を組み、エコミュージアム会員含めての盆踊りが行われた。芸術祭のイベントスケジュールに掲載されることもなく³¹、その来訪者もない盆踊りの輪は、何度も車田を巡った。集落の夏の中心的行事が分校の校庭に戻っただけでなく、芸術祭の期間中、

価値・意味が見いだされている。現代アートにおける植樹は、ドイツの作家ヨーゼフ・ボイスにちなみ、「社会彫刻」の文脈から捉えられたり、国内においては、2000 年代に入って隆盛したアートプロジェクトの先達的取り組みとも言われる「時の蘇生 柿の木プロジェクト」(95 年～宮島達男)などがある。

²⁶ とはいえ、分校には 90 日間で約 4800 名、集落のそば店にも一日最大 80 名ほどの来客があり、閉会の打ち上げは、かつてない集落の活気に湧いた。

²⁷ 2009 年発表者が枯木又集落の担当に任ぜられた際の、大地の芸術祭総合ディレクター北川フラムの言葉。

²⁸ 従来型のいわゆるハコモノ美術館(博物館)からの脱却の必要性の指摘、拠点施設や空家・廃校作品・野外展示を巡る鑑賞形式とそれを通じた地域の自然・文化・産業等の前景化、住民との協働の焦点化など。こうした取り組みの背景としては、①「アートワールド」(ダントー的)の権威性批判や民族誌的転回を通じた、芸術の場の日常/社会空間への進出やリレーショナルアートの隆盛 ②60 年代以降の地方自治体主導の彫刻設置事業やパブリックアートの見直し ③開かれた美術館(博物館)＝生涯教育機関としての役割の重点化と 98 年 NPO 法成立を受けて増大した市民活動団体との結びつき ④ユネスコの方針・文化経済学の移入等に基づく国内文化政策の転換 などが挙げられる。

²⁹ これらの一連の活動は、総務省が平成 21 年度より推進する「緑の分権改革」の委託調査事業(平成 23 年度十日町市受託分)の一部「(大地の芸術祭を通じた)コミュニティデザインプロジェクト」のひとつとして取り上げられている。緑の分権改革は、「それぞれの地域が、自然環境、クリーンエネルギー、食料、歴史 文化遺産の価値等を把握し、最大限活用する仕組みを創り上げていくことによって、地域の活性化、絆の再生を図り、『地域から人材、資源、資金が流出する中央集権型』の社会構造を『分散自立・地産地消・低炭素型』としていくことにより、『地域の自給力 と創富力(富を生み出す力)を高める地域主権型社会』への転換を実現を目指す政策。

³⁰ 「四季の推移が明確な北国の生活や文化は、昔から自然のサイクルと一致しながら築き上げられてきました。そこには、大量生産-大量消費-大量廃棄を基調とする経済のあり方とは全く異なる価値観が存在します。時間の解釈も、直線的な発展・進歩を続ける<歴史的な>ものではなく、過去・現在・未来を包み込み循環する<神話的な>ものと捉えられます。枯木又(ママ)プロジェクトはこうした地域性に基づきながら、季節・風土・文化に呼応するサイト・スペシフィックなアート作品を通して、現代生活の価値観を再考する企画を展開しています。」(カレキマタプロジェクト 2012 フライヤーより)

³¹ 作品が設置されているいくつかの集落の盆踊りや祭りは、芸術祭の舞台や講演とともに掲載された。

交流施設「のっとこい」に開かれたそば屋では、精華大学と集落で作った畑から採れた手打ちそばが提供されるとともに、地域の灰でできた釉薬を使ったそば猪口や皿が用いられたり、運営スタッフに学生が加わるなど、エコミュージアムの活動そのものと芸術祭プロジェクトとの連動が見られた³²。

さらに作品そのものも、巡る四季を通じてつきあいを深めた経験に基づくものが多く³³、分校からのっとこいまでそのエリアも広がっていった。3年前と異なり、今夏は、エコミュージアムと京都精華大学それぞれの活動が、分校とのっとこい2つのコアを中心に展開された。枯木又におけるエコミュージアムの布置は、新たな段階に移行しつつあるのかもしれない。

³² 先述のとおり、この連動はコミュニティプロジェクトとして芸術祭主導で企画されたものではなく、元々の内発的な動きとカレキマタプロジェクトの新たな展開との融合によるものである。

³³ 集落で採取した雪解け水を入れた硝子キャニスターによるインスタレーション「Snow Room」(小松敏弘)、校庭の木を取り囲むように設置された高さ6mに及ぶジャングルジム「キセイ・樹」(今村源)、枯木又の土を用いた器を焼成する「いってこいのっとこいプロジェクト～龍王窯～」(小川文子・田辺桂)、地域の龍王伝説の龍が蛙に舞う「枯木又龍王伝説」(兼松恵子)、分校のロッカー等の備品を使ったインスタレーションの写真展示「Memory project」(岸本洋平・中嶋悠輔・濱上翼・岡田吉弘)、ヒアリングをもとに分校オリジナル校歌を作る「枯木又分校校歌」(永井麻菜)、2階の教室廊下の床に墨汁をためて、内外の景色を映し出す「静かに目をむけた」(中島伽椰子)、鉄製の道具・機械を溶かして記憶を蘇らせる「記憶-蘇生」(若林亮)など。いずれの作家も、年間を通じた集落への来訪や諸行事への参加ののち、度重なる滞在・準備を経て作品を制作した。付き合いを深めるにあたって、エコミュージアムの諸活動・行事は、重要な契機となっていた。また、芸術祭開催年以外にも、芸術学部立体造形コースの1回生を中心に履修される授業科目(美術演習Ⅰ、Ⅱ)のプログラムとして、学生主体の展覧会・ワークショップや、雪掘り活動・そばプロジェクトなどが行われた。